

今回は主に6節から8節までを中心に学ぶことにする。ここには3つのことが記されている。一つは、6-7節で「イスラエルのために国を建て直す」ことについてのこと。二つ目は、8節前半で「聖霊が降って、力を受ける」という弟子たちへの約束。三つ目は、8節後半で、その力を受けた弟子たちが「エルサレム」から「地の果てに至るまで、イエスの証人となる」という展望である。

6節

「さて、使徒たち一彼ら一は集まって、『主よ、イスラエルのために国を建て直してください。この時ですか』と尋ねた。」

ルカによる福音書では、イスラエル王国の再建について弟子や主イエスがお語りになるということにはなかった。ここで急にこのような質問が出たのは驚きであるが、しかし、主イエスの弟子の中には「熱心党のシモン」(13節)というような愛国主義者がいたことを考えると、このような質問が出てくるのはおかしくない。

「イスラエルのために国を建て直す・・・」というのは、イスラエルに主権の戻るのはいつか、という問いである。100年ほど独立していたユダヤがこの数十年ローマの属国となっている。だから、いつまたイスラエルの国が再建されるかということの問題にすることは不思議なことではない。

「この時ですか」という「この時」とは、今弟子が先生と話をしている「この時」という意味ではなくて、先ほど先生から聞いた「聖霊による洗礼を授けられる」時、その時にイスラエルも再建されるのでしょうか、という質問である。

7節

「イエスは言われた。『父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。』」

「時」(χρόνος、クロノス)「時期」(καιρός、カイロス)。厳密に言うと「時」は期間を表す。そして「時期」と訳されている方は、チャンスとか機会とかを表すが、組み合わせるとあまり区別のない、口語訳では「時期と場合」、新改訳では「いつとか、どんなときとかいうこと」と訳しているが、そういう意味合いになる。

この主イエスのお答えでは「時」も「時期」も複数形に変わっている。弟子たちが聞いたのは、イスラエルに国が建て直される、一つの時、これがいつでしようかと聞いたが、主イエスはその問題から自由になって一般論として「いろいろな時やいろいろな時期」という問題に移っておられる。

「御自分の権威をもって」とは、「御自分の権威の中で、権威の内に」と訳せる。また、「お定めになった」と訳されている(τίθημι、ティセミ)のは、本来、「置いた」とか「据えた」という言い方である。つまり、「父が御自身の権威の内に置いておられるもろもろの時、いろいろな時期」、こういうことである。神様が「御自身の権威の中に置

いておられる」、つまり、私たちには隠されている「時期」や「時」については、「あなたがたの知るところではない」。こう言われておられる。神様が「御自身の権威の中に置いておられる」さまざまな、人間から見ると謎だとか神秘だとか、知りたいが知らされていないことというのがありますが、そういうものまで、私たちは知ろうと言って心を費やすことはない、そう言っておられるのである。

神様が「御自分の権威の内に置いておられる」ことについてまで、私たちはとやかく詮索したり心配することはない。そういう分を超えたところまで私たちが詮索し始めると、ノイローゼになったり不安になったりするのだと思う。主イエスはマルタに向かって「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」と忠告なさった(ルカ 10:41)。神様は、わたしたち人間の小さな心には少しのことだけで済むように、多くのことを「御自身の権威の中に置いて」おられる。だから、そういう要らぬことまで気を配らないで、むしろ、これから言う次のことに心を集中しなさい、こう主イエスはおっしゃりたいのだと思う。それが 8 節である。結局、6 節の「この時ですか」という問いに 7 節が答え、「イスラエルのために国を・・・」というのに対して 8 節が答える、という格好になっている。

8 節前半

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」

ここで「聖霊」と言われているのが、4 節では「父の約束」と言われたもの。それから、5 節では「聖霊による洗礼を授けられる」と比喩的に表現されたものが、ここでは「聖霊が降る」と言い換えられている。

「あなたがたは力を受ける」の「力」は、ルカによる福音書 24 章の方では「高い所からの力」、超自然的な力と言われている。

その「力を受ける」というところも、ルカによる福音書では「覆われる」と言われている。全身すっぽり、この超自然的な聖霊による力に全身丸ごと覆われてしまう、別人のようになる、こういう約束である(サム上 10:6 参照)。

もちろん、この「力」はその次に語られるように「わたしの証人となる」ための「力」である。使徒言行録の中で「力」と訳されている言葉(δύναμις、デュナミス)は、この後 9 回出てくる。その用例の中で、今日と関係あるところを総合すると、「言うべきことを言う」とか「行うべきことをちゃんと行える」という「力」、これを表す。今、主イエスが言っておられる「力を受ける」という「力」も、恐らくこの意味だと思われる。証言すべき時に証言すべきことを証言できる力、証人となるべき場で証人となることができる力、こういう「力」なのだと思う。

「証人」(μάρτυς、マルトウス)。英語では martyr という“殉教者”をも表すようになった。この「証人」という言葉が使徒言行録には 13 回出てくる。その中の最後、22 章 20 節でパウロが振り返って語っているところ。

「また、あなたの証人ステファノの血が流されたとき、わたしもその場においてそれに賛成し、彼を殺す者たちの上着の番もしたのです。」

ここで「あなたの証人ステファノ」というのは、「血を流された」、殺された「殉教者」

という意味になっている。

このように、早くもルカの時代に、「証人」と言う言葉に、“命がけで殉教してでも証言する”という意味がついている。このことは、イエス・キリストの証人になるのにどんなに尋常ならざる「力」、「高い所からの力」が必要であるかを、よく示している。

イスラエルの国の問題なんかよりも、このこと、イエスの証人に命がけなれるために聖霊を授かり、いと高き所の力に覆われること、このことに関心を寄せなさい、そうイエス様はおっしゃるのである。

8 節後半

「そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

ルカによる福音書 24 章 47 節では「あらゆる国の人々に」と言われているのが、ここでは「エルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで」と丁寧に語っている。これがこれからルカの記す使徒言行録の目次であるとする、**「エルサレムで」**というのが 7 章まで。それから**「ユダヤとサマリアの全土で」**というのが 8 章から 9 章 31 節までをもって締めくくられる。**「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった」** (9:31)

そこから後が**「地の果てに至るまで」**という筋になる。そして使徒言行録の最後は、ローマに行ったパウロが**「神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」**、というところで終わる。

「地の果て」という言葉は、旧約聖書以来なじみの「はるか遠く隔てた所」、いわゆる「遠隔地」という意味で一般に預言者たちに使われた表現である。

旧約聖書の預言者たちは、イスラエルの神ヤハウェの栄光がいつか全世界を覆い、そしてイスラエルの神ヤハウェを恐れる宗教が世界の果てにまで全人類を包むという、そういう輝かしい将来を幾人も預言した。

その場合に、普通、旧約聖書の預言で全世界の宗教となるヤハウェ宗教というのは、“地の果てからシオンに巡礼してくる”という形で語られる。“もろもろの国からエルサレムへ、シオンへと巡礼して、そしてシオンの神を礼拝する”、こういう形でヤハウェの宗教が人類の宗教になるということを描いている(イザヤ 2:2-3、45:14、55:5、60:34、16、66:18-24、ゼカリヤ 2:14-17 など)。

異国の国の異邦人たちが回心して、イスラエル人の**「裾をつかんで言う。『あなたたちと共に歩かせてほしい』**」こう言ってシオンに来る(ゼカリヤ 8:25)。

この旧約聖書の背景から今の主イエスの言われる言葉を聞くと、まるで違うということに気付かれる。**「あなたがたは、地の果てに至るまで、こちらから「地の果てに至るまで、わたしの証人と」して証言する、と。マタイによる福音書の終わり方の言い方**という、**「行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい」**。主イエスは、こちらから相手の場所へ、エルサレムからユダヤへ、更にサマリアへ、更に地の果てにまで**「行って」**、

イエス・キリストを証する。これをキリスト教の伝道とか宣教と言い、ユダヤ教の運動とは逆に行くのである。

この点について、イザヤ書 40 章以下、いわゆる“主の僕”について預言する中で、イザヤ書 49 章 6 節「**こう言われる。わたしはあなたを僕として、ヤコブの諸部族を立ち上がらせ、イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして、わたしはあなたを国々の光とし、わたしの救いを地の果てまで、もたらず者とする**」。これは、地の果てからシオンに来るといふのは正反対の動きである。「**イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして**」もっと偉大な使命は「**わたしの救いを地の果てまで、もたらず**」ことだと言う。

使徒言行録 13 章 47 節まで進むと、パウロは、このイザヤ書の預言が「わたしたちに」命じられていると、こう言い切っている。「**主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てにまでも、救いをもたらすために。』**」主の僕メシアだけではなくて、その弟子たる者は同じように「**地の果てにまでも救いをもたらす**」使命を持っているのだ、パウロがこう言ったので、異邦人は非常に喜んだと。

このように、今主イエスが「エルサレム」から始まって「**地の果てに至るまで、わたしの証人となる**」と言われることは、旧約の預言者が語っていたこととは反対に、こちらからすべての国民のところに出て行って、その国民の人たちに福音を語り、主イエスを証言し、救いをもたらすという、そういう世界宣教の使命である。

地の果てに至るまで出て行って証言をしようとする、まず、相手の人々の言葉を学んで、その相手の人の言葉を習得して、証言を始めるわけである。このこと、先取りのしるし、それが 2 章の“ペンテコステの日に聖霊が降って、国々の言葉で人々が語り出した”というあの出来事である。あれは、これから地の果てまで弟子たちが証言をしていく働きの、先取りの保証みたいなものをお示しになったわけである。

「**聖霊が降ると**」こういう「**力を受け**」て、あなたがたは「**地の果てに至るまで**」証言していくことができるのだということ、ペンテコステの日に先ず示されたわけである。

これは言葉だけではない。相手の人々の言葉を習得するということは、同時に相手の人々の生活や習慣や何もかも学ぶということである。だから「**地の果てに至るまで、わたしの証人となる**」ということは、どういうことかという、**「地の果てに至るまで」**相手と同じようになっていく、相手と一つになっていく、そういう中でイエス・キリストを証しするということである。これは難しい。相手と一つとなるのだが、でも妥協ではない。相手の言葉を習得してべらべらに話せるようになるのだけれども、でも話すことは主イエスを証言することである。こういう困難な仕事、それが「**イエスの証人となる**」という仕事である。この困難な業を進めさせるために、主は「**聖霊**」をキリスト者たちに降し、「**力**」を受けさせてくださるのである。